中国11月28日

皮膚の病気あれこれ ⑫

岩崎泰政

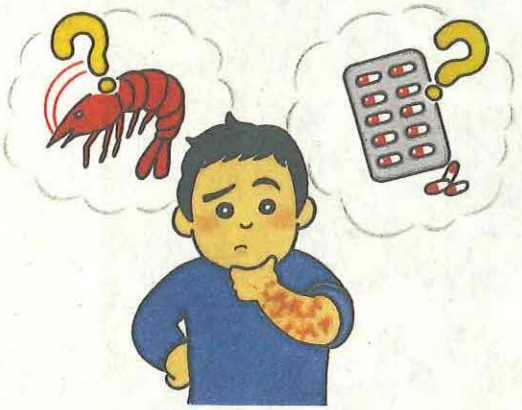
じんましん

7割以上 原因分からず

広島県など西日本のお年寄りは、じんましんのことを「ほろせ」と言いますね。「何日もほろせが出るが、思い当たる原因がない」と、内臓の病気などを心配して受診する患者さんは多いです。

じんましんは、突然、蚊にかまれたような赤く少し盛り上がった膨らみができます。数時間で跡形もなくなりますが、また別の場所に。かゆいからと、かいてしまうと、みみず腫れのように広がります。4～5人に1人は、一生に一度は経験します。唇やまぶたが腫れたり、息苦しくなったりする人もいます。

原因となるのは、エビやカニ、サバやマグロ、そばなどの食べ物、かぜや痛み止めの薬など。物に強く当たったり、引っかいたりする刺激、運動や入浴で体が温まった時や、汗をかくと出る人もいます。まれに冷たい風や水に触れたり、日光に当たったりしても発症する場合もあります。



イラスト・霜野美香

ところが、患者さんの7割以上は、詳しく調べても何が原因か分かりません。内臓の病気が引き起こすことはほとんどありませんが、お酒や香辛料などの刺激物、寝不足や疲れ、ストレスはしばしば症状を悪化させます。かくと症状が広がることが多いので、かかないようにしましょう。保冷剤などで冷やすと、かゆみが和らぐことがあります。

塗り薬は効きません。治療はかゆみを止める抗ヒスタミン薬を飲みます。効果が出ない時は量を増やしたり、種類を変えたり、何種類かを組み合わせたりします。それでも治りにくいならば、ステロイドの飲み薬を加えることがあります。

さらに治りにくい時は、オマリズマブという新しい注射薬が使えるようになりました。高価ですが、じんましんを起こす原因物質の元となる「IgE」に直接働き掛けます。広島大病院皮膚科は、アジア初のじんましんの国際診療センターとして治りにくい患者さんに対応しています。

（岩崎皮ふ科・形成外科院長＝福山市）

＝おわり